HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	哺乳類学者・進化学者 徳田御稔の足跡
Author(s)	大舘, 智志; 金子, 之史; 岩佐, 真宏 他
Description	2010年度大会自由集会記録
Citation	哺乳類科学, 51(1), 206-211
Issue Date	2011
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46833
Type	conference paper
File Information	51_206.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

哺乳類科学　51(1)：206-211，2011
©日本哺乳類学会

2010年度大会自由集会記録

哺乳類学者・進化学者　徳田御稔の足跡

大舘　智志[1]，金子　之史[2]，岩佐　真宏[3]，
本川　雅治[4]，三中　信宏[5]

[1]北海道大学低温科学研究所
[2]元香川大学教育学部
[3]日本大学生物資源科学部
[4]京都大学総合博物館
[5]農業環境技術研究所

1. はじめに

大舘智志（北海道大学低温科学研究所）

徳田御稔（とくだ　みとし）（1906–1975）は第二次大戦前後に活躍した動物学者，進化学者である．彼は東アジアの齧歯類分類の本格的な発展に寄与し，また生物地理学，進化学に関する書物を多数出版し，戦後の哺乳類学のみならず進化生物学に大きな影響を与えた．現在の日本の中核的な哺乳類研究者は彼の直接的，間接的孫弟子にあたるものも多い．また，戦後の哺乳類学研究の要石である『哺乳類科学』誌の創刊初期には，徳田が先頭になって論陣を張ってきたことからもその影響の大きさは分かろう．このように徳田が日本の哺乳類学，特に小型哺乳類の分類や生態研究の発展に果たした役割は大きい．一方，戦後に徳田の著した『生物進化論』，『二つの遺伝学』，『進化学入門：種の問題を中心に』，『進化・系統分類学』などの一連の進化関連の著作は，同僚である今西錦司の進化論とともに日本の進化研究に多大な影響を及ぼした．しかし，彼の弁証論法的進化論は今西進化論と同様，現在の日本の進化学においては批判的に評価されている．このように日本の哺乳類学・進化学研究に徳田が与えた影響には正と負の側面があるといえる．徳田の没後，四半世紀以上が経過し，直接指導を受けた人や論議をされた人びとも定年を迎えられたか，あるいは鬼籍にはいられている．従って今こそ，彼の業績を正しく評価し，是は是，非は非と，徳田の影響の評価を哺乳類学会の場でキチンとすべき最後のチャンスであると考え，この集会を企画した．サイエンスにおいて「曖昧な態度」は忌むべき姿勢と考える．徳田のようにすぐれた学者が，曖昧な評価のまま忘れ去られてしまうことは避けたい．今回の集会には特に「徳田御稔」という名前すら聞いたことのない若手（御稔をミトシと読めたひとがどのぐらいいるだろうか？）の参加も望みたかった．総括と論議こそが学問の発展の為には必要であり，それが新たな流れにつながる．

今回は野生生物保護学会との合同大会ということもあり，基礎科学的な集会を企画せねば発表や集会が応用科学的研究に大きく偏重し，哺乳類学会が自然科学の学会としてバランスを崩してしまうのではないかとの危機感もあった．そこで，大舘が発起人となり，岩佐氏，三中氏と2010年3月の日本生態学会東京大会の時に会談し，当自由集会開催に向けて動き出した．三中氏は哺乳類学会とは特に接点が無く，また多忙の身でありながらも協力を快諾していただいた．

演者には先ずは徳田の直弟子にあたる金子之史氏に是非ともお話を伺いたいと打診したが，固辞する金子氏を岩佐氏が説得にあたり了承していただいた．金子氏には徳田御稔の経歴などに対してお話いただくことにした．また生物地理，齧歯類分類に関する学譜上の孫弟子にあたる本川氏と岩佐氏にはそれぞれ，生物地理学，齧歯類分類に関する業績の紹介をしていただいた．三中氏には，徳田進化論，種概念への批判的立場から論評をねがった．最後の総合討論では，徳田を中心とする哺乳類研究グループ（日本哺乳類学会の前身の一つ）創成時の若手として徳田と論議を重ねた阿部永氏にも参加いただいた．

今回の哺乳類学会は他の学会との合同大会であり参加人数が多いことが予想され，また各種集会，シンポジウムが目白押しで，大会実行委員の方々は集会の開催時間の調整は非常に苦労したと思われる．憂慮が現実となり，当集会と同じ時間帯に，「食虫類の自然史」の集会も開催され，食虫類研究に関係している阿部，本川，岩佐，大舘はそちらの集会に出席できなかった．逆に，他のいくつかの集会企画者・演者からもこちらの集会に参加したいがかなわず残念であると伝えられた．学会が大きくなれば，このような調整は難しくなるのは致し方ないことであり，今回のようなブッキングは学会として成長したことの証であると，良い方に解釈したい．またある方から，会場となった岐阜大学は徳田御稔とは私的に因縁のある大学と聞かされ，偶然の一致に驚いた．

当日の集会のスケジュール

司会・進行．大舘智志

(1) 導入，趣旨説明「徳田御稔って誰？」．大舘智志（北大低温研）5分
(2) 徳田御稔の個人史―経歴と業績―．金子之史（元香川大教育学部）20分
(3) 徳田御稔と齧歯類分類．岩佐真宏（日大生物資源科学学部）20分
(4) 徳田御稔と生物地理学．本川雅治（京大総合博物館）20分
(5) 徳田御稔の分類と進化論．三中信宏（農業環境技術研究所）20分
(6) 総合討論　以上の演者＋阿部永（元北大農学部）．20分．司会，大舘．

2. 講演要旨

以上にあげた4つの基調講演の要旨は以下の通り（講演要旨の文責は発表者）.

2-1. 徳田御稔の個人史―経歴と業績―

金子之史（元香川大学教育学部）

私は徳田御稔に京都大学大学院の時代に指導を受けた. 徳田の没後も陰に陽に徳田を振り返りながら自身の研究生活を続け種々の学びをえた. この自由集会では, 徳田の個人史を, 徳田が育った日本の政治や社会の歴史的変化との関連でみながら, 演者が得た学びの一部を述べたい. 徳田は兵庫県神戸市で誕生し, 北海道帝国大学農学部卒業後, 京都帝国大学理学部大学院で第1講座駒井卓教授の指導を受けた. 彼は大学院入学後から無給講師の間, 日本および近隣の大陸や島嶼のネズミ類の分類・生物地理の研究を精力的におこない, 1941年には日本動物学会賞を受けた. しかし, 第2次世界大戦後は具体的な研究よりも, 進化学やルイセンコ論争への啓蒙的な活動が目立った. ルイセンコ論争は徳田の個人的な問題だけではない. 仮説と事実の検証関係は個々の研究者の課題でもあり, イメージ先行やカリスマ・権威などの社会心理・経済的な側面は我々の自立の問題でもある. また, 科学的知識の勾配がある一般市民への啓蒙の在り方なども未解決である.

2-2. 徳田御稔と齧歯類分類

岩佐真宏（日本大学生物資源科学）

徳田御稔は, その研究人生の前半（主に戦前）で, ネズミ類の分類に大きな足跡を残している. 特に分布を考慮した生物地理学的観点から, 分類体系を再構築した1941年発行のモノグラフ『A revised monograph of the Japanese and Manchou-Korean Muridae』は, 現在でもそのバイブル的存在として色褪せていない. しかし, 種の定義が現在ほど提唱されていなかった戦前において, 徳田が認める種は, その根拠が不明瞭なものも少なくない. 一方, 研究人生の後半（主に戦後）では, 分類に関する論文・著書の類をほとんどリリースせず, 種の意義や進化論に関する多くの出版物を出している. かつて徳田が精力を注いだネズミ類の分類は, どのような背景で行われたのだろうか？徳田が考えていた種分類とはどのようなものだったのだろうか？そのモノグラフを中心に据えて掘り下げてみると, 初期の徳田分類は鑑別的な傾向が窺えるが, これは日本の哺乳類分類学黎明期に共通するものでもある. ただし, 地理的要因を大きく絡めた上での分類体系の構築は, 種の定義に関する視点は別として, 当時は斬新なものであっただろう. 徳田を含む先人達の礎のもとに, 現在進行形の我々がいることを思慮せねばならない.

2-3. 徳田御稔と生物地理学

本川雅治（京都大学総合博物館）

徳田御稔の生物地理学に関する主要著書として『日本生物地理』（1941年, 古今書院）と『生物地理学』（1969年, 築地書館）がある. このうち, 学位論文と同年に出版された『日本生物地理』に徳田の考えが凝縮されているので, 本発表ではその内容を中心に紹介, 議論した.『日本生物地理』の副題は「東亜鼠類の進化学的研究より見たる日本列島の地史及び生物相の発達史」である. 地史と生物相の発達史を結びつけ, 隔離の重要性を指摘したことが当時から斬新で, 現在でもこれこそが徳田の生物地理学と評価されているように思う. しかし, 徳田の『日本生物地理』には, 他にも多くの注目すべき事がある. 生物の変異に注目し, 個体変異, 一般地理的変異, 特殊地理的変異として識別したこと, 特殊地理的変異の形成における地理的隔離の重要性に着目し, 事例について検討したこと, 区系生物地理の問題を整理したことなどである. 関連して注目すべきことは, 徳田が生物地理の議論では正しい分類体系が重要であると認識し, 自らが東アジアを対象地域としてネズミ類の分類研究を行った成果をもとにした議論を組み立てたことである. 同じ対象動物を扱う者として強く感じるのは,『日本生物地理』に徳田自身の採集や野外調査での知見が強く反映されていることである. さて,『日本生物地理』から60年近くが経過し, 遺伝子解析による系統関係や分化パターンの理解が進み, 種分類の知見が大きく増加したが, それによって東アジアの哺乳類の生物地理に関する視点・アイデアについて, 革新的変化が見られただろうか. 私は, いまだに徳田の枠組みの中にいるのではないかと感じ, これこそが現在の生物地理学がかかえる問題と考える.

2-4. 徳田御稔の分類と進化論

三中信宏（農業環境技術研究所 / 東京大学大学院農学生命科学研究科）

徳田御稔の著書とりわけ『二つの遺伝学』（初版1952年）は, ルイセンコ主義が蔓延した戦後日本の科学界・思想界において必読文献とみなされていた. 左翼系出版社である理論社から刊行された本書の中で, 徳田はメンデル遺伝学は“観念論”的であるとして排除し, 獲得形質遺伝を認めるミチューリン遺伝学を学ぶべきであると主張した.「ルイセンコ論争」として後世に知られるこの論争に隠れたもうひとつのエピソードに本講演では焦点を当てたい. それは徳田の弁証法的唯物論に則った「種実在論」が, 第二次世界大戦直後の混乱期にあった日本に産み落とされ,「種族維持のための単位として実在する種」という（負の）知的遺産を残したという事実についてである. 同時代の1940～50年代にかけて, 進化の「総合学説」を構築しつつあったエルンスト・マイアやテオドシウス・ドブジャンスキーが主張した生物学的種概念に対して, 徳田は強く反対する論陣を張った.「種」に関する徳田の基本的立場は,「種」は「個体」とは質的に異なる発展段階にある物質状態として定義できるというものである. 物質のとる状態の間の対立や矛盾を通じての量から質への転換を説く弁証法的唯物論はいまではもうすっかり廃れてしまった. ヘーゲルの観念論的弁証法に始まり, マルクスやエンゲルスの思想に沿った弁証法的唯物論にいたる系譜は万物の「運動法則」を求めようとする.「種」が個体や細胞のレベルとは“質的”に異な

る物質段階であるという徳田の主張は，この弁証法の延長線上に「種」独自の歴史的運動法則があるにちがいないという信念を植え付けた．現代的な視点から見て，その考えがいかに奇妙であったとしても，それに惹かれる事例は後を絶たない．本講演では，「種」の実在性に対する信念が，ある政治的信念と結びついたときの結末を，徳田のケースを取り上げることで考察してみたい．

3. 当日の報告と議論

大舘智志（北海道大学低温科学研究所）

当日は，前述のごとく潜在的に競合するいくつかの集会と同時開催であり，参加人数が少ないことが危惧された．しかし集会の始まりでは50名に満たない参加であったが，最終的には60名以上の参加者があり，まずまずの盛会に終わったといえよう．参加者の顔ぶれも歴代哺乳類学会会長や重鎮，ベテランの方々の参加があった．徳田御稔が没してかなりの年数が経つのにこの錚々たるたる顔ぶれの参加者をみて，「虎は死して皮を残す」のもじりで「徳田は死して名を残す」という思いであった．思想・理論の是非はともかく，研究者はかくありたいものである．また今回，参加を期待していた若手も予想していたよりは多くて安堵した．同じ会場では次の時間帯に別の集会が予定されていることから時間厳守で粛々と講演が進んだが，各自の持ち時間20分，総合討論20分はいささか時間的に十分ではなかった．少なくとも総合で二時間があればもっと突っ込んだ議論などができたと思われる．

まず金子氏の講演では，さすが師のことであり綿密にその軌跡が説明された．金子氏の制作に基づく年表を元に私が改編した略歴をあげる（表1）．講演内容で印象深かったのは，徳田氏は，話すことと書くことで異なった場合があるが，それは書くときは曖昧な点は残さずに白黒はっきりして書かねばならない，という哲学を持っていたということである．また，責任感が強く，周りからなにかの職に担ぎ出されると，その職務をまっとうしたそうである．私は徳田のこの性格により，晩年に彼が弁証法的進化論の枠からどうしても抜け出せずにいたのではないかと考えるようになったが，実際はどうだったのであろうか？ また，金子氏は最後に人物評や物事を二値的な考えで二分するのは問題があり，様々な角度から評価すべきであると主張された．

岩佐氏の，ネズミ類の分類の実際例では，シコタンヤチネズミ（原記載 *Neoaschizomys sikotanensis*）の問題が記憶に残った．彼が色丹島から記載したシコタンヤチネズミについての分類，分布には紆余曲折があり，記載当時には現代のムクゲネズミ *Myodes rex* とタイリクヤチネズミ *M. rufocanus* の識別をしないままであった．ムクゲネズミは現在の日本人研究者の間では南千島，利尻・礼文，北海道本島と樺太本島の一部に分布していることとなっている．しかしロシアでは別の解釈をする研究者もいる．徳田が東アジアの齧歯類の本格的記載分類を始めることができたのは，当時，大日本帝国が満洲，朝鮮，樺太，千島などの地域を支配していたからに他ならない．大英帝国などの西欧列強の博物学的研究が進んだのも植民地支配のおかげであるが，かなり遅れて日本もその流れに乗った．しかし，日本の敗戦と同時にこれらの「外地」は独立あるいは外国の実効支配地となり，日本の東アジアの哺乳類の生物地理学的研究は大きく後退する．そして冷戦後にロシアや中国，韓国，台湾，東南アジアの研究者との連携のもと90年代半ばあたりから，東アジア全域を含む研究が再び活発になってきた．昨今の南千島や尖閣諸島，朝鮮半島でのきな臭い動きによって，東アジアでの哺乳類研究に影が差し込まないことを望みたい．

本川氏の講演では主に徳田の生物地理学的業績についてまとめていただいたが，徳田の生物地理学の特徴として，(1) 東アジアを的確に対象地域とした，(2) 正確な分類，(3) 自身のフィールドワークからの知見，(4) 区系生物地理学の枠組みの再編，(5) 種内変異の把握，が重要であるとしている．私はこのなかで特に種内変異の把握を重要とした点を特に評価したい．これが，阿部永氏の日本産モグラ類の分類学に受け継がれ，さらには現在の日本のモグラ類研究の質の高さに繋がっているのだとおもう．徳田はこのように，「種」や個体群は空間的にも時間的にも変化するものだということを十分に認識していたことは明らかである．にもかかわらず，徳田の晩年の進化論の「種族維持の単位としての種」つまり「硬直した種」の概念との矛盾に私は注目したい．

さて，本川氏はこれらの徳田の研究の特徴を挙げた上で，我々は徳田が構築した生物地理学の枠組みを越えなくてはならないと主張している．私は，本川氏の東アジアにおける分類学，生物地理学的な活発な活動は，徳田の学問的継承者として「嫡流」のように思える．その彼が徳田の枠組みを超えようとしている事は学問の発展上，当然のことである．徳田の区系生物地理学の再編のおかげで，現在ではブラキストン線や慶良間ギャップなどの生物地理学的境界線は，あくまで便宜上のものであり，そこに「線」が実在しているという呪縛からは我々は既に解き放たれている．ただ，生物地理学的区系は実在ではなく便宜上のものであるとしながら，「種」については便宜ではなく実在するとした，徳田の論法が私にはどうしても納得がいかない．また私が本川氏の講演で気になったのは「正確な分類」ということである．これは，金子・岩佐氏にも共通する事であるが，徳田の影響の大きい研究者は，種の実在性に基づく「分類思考」を強く持っている印象を受ける．確かに，言わんとしている正確な分類というのは，私（大舘）にも感覚的には分かる．正しい分類無くしては，生物相の成り立ちは理解できないと．しかし，極端な話，「種の分類」ができなくとも，例えば現在主流の系統地理学では，分析する個体の「遺伝子の系譜」が分かれば，生物地理学的研究もできるのではないか？今のところ私自身は，伝統的な形態による分類をベースに研究を進めるべきであると思っているが，これは単に研究上の便宜的問題だとみなしている．この問題は本川氏や岩佐氏とは意見のかみ合わないことなので，いつか議論したいと思っている（生物分類と分類記載は重要なことであることは一致しているが）．生物地理学にとって，系統関係の把握の重要性は，徳田は『生物地理学』でも力説しているところであり，今の日本の哺乳類学における系統地理学の隆盛は徳田の影響かもしれない．さらに，系統発生と個体発生の関係の重要性に早くから注目したの

表 1. 徳田御稔略年表．金子之史氏制作の年表を元に大舘が追加・改編

西暦	元号	月／日	徳田御稔の出来事	年齢（約）	社会的出来事
1906	明治 39	10/13	神戸市生田区で海軍軍人の子として誕生	0	満鉄会社設立の勅令公布
1907	明治 40			1	樺太庁設置
1910	明治 43	8		3	韓国併合
1914	大正 3	7		7	第一次世界大戦勃発
1919	大正 8	3	神戸市諏訪山尋常小学校卒業	12	ヴェルサイユ講和条約
1920	大正 9			14	戦後恐慌発生（株式大暴落）
1923	大正 12	3	神戸市第一中学校卒業	16	ヒットラーのミュンヘン一揆（即日鎮圧）
1923	大正 12	4	北海道帝国大学予科入学	16	関東大震災（9 月）
1927	昭和 2	4	北海道帝国大学農学部入学．指導教官：八田三郎教授，犬飼哲夫助教授．	20	金融恐慌，第一次山東出兵
1930	昭和 5	3	同上　卒業	23	世界恐慌，ナチス第 2 党に躍進
1931	昭和 6	4	京都帝国大学理学部大学院入学．指導教官：駒井卓教授．	24	満州事変（柳条溝事件）
1932	昭和 7			25	上海事件（1 月），満洲国建国（3 月），犬飼首相暗殺（5 月），ナチス第 1 党（7 月）
1935	昭和 10	3	京都帝国大学理学部副手（無給）	28	天皇機関説（2 月），日本生物地理学会創立
1936	昭和 11		『齧歯類の遺伝』（養賢堂）	30	2・26 事件，日独防共協定（11 月），オパーリン『生命の起原』
1937	昭和 12			30	日中戦争開始（蘆溝橋事件）（7 月），ドブジャンスキー『遺伝学と種の起原』
1940	昭和 15			33	デ・ビアー『発生と祖先』
1941	昭和 16	5	『日本生物地理』（古今書院）（1940/7/21 原稿完成）	34	
1941	昭和 16	10	京都帝大より理学博士の学位授与（A　revised monograph ...），日本動物学会賞受賞（仙台）	35	日ソ中立条約（4 月），日本軍ハワイ真珠湾攻撃，日米開戦（12 月）
1942	昭和 17	3	京都帝国大学理学部講師（無給）	35	日本軍マニラ占領（1 月），東京初空襲（4 月），ミッドウェー海戦（6 月），米ガダルカナル島に上陸（8 月），フェルミら原子核分裂の連鎖反応に成功（12 月）
1944	昭和 19	6	陸軍技師，『大東亜の動物：哺乳類・南方篇』（精華房）	37	米サイパン島上陸（6 月），10 月レイテ沖海戦（10 月）
1945	昭和 20			38	米沖縄本島に上陸（4 月），原子爆弾広島・長崎に投下，ソ連対日宣戦布告，ポツダム宣言受諾・敗戦（8 月）
1946	昭和 21	6	京都帝国大学理学部講師	39	天皇の人間宣言（1 月），極東国際軍事裁判の開始（5 月），日本国憲法公布（11 月）
1947	昭和 22			41	学校教育法公布・施行，京都帝国大学を京都大学と改称
1948	昭和 23		『生物進化論』（日本科学社）	42	ルイセンコ学説がソ連における進化の公式見解となる
1949	昭和 24			43	湯川秀樹ノーベル物理学賞
1951	昭和 26		『進化論』（岩波書店）	45	サンフランシスコ対日平和条約締結（9 月）
1952	昭和 27		『2 つの遺伝学』（理論社）	46	
1953	昭和 28		『現代の進化論』（編著）（理論社）	47	スターリン死す，朝鮮戦争終結（1950 ～），ワトソンとクリック，DNA の構造決定を発表（Nature）
1954	昭和 29	10	京都大学理学部助教授，『野鼠とその防除』（分担執筆）（日本学術振興会）	48	日本ミチューリン会設立（2 月），ビキニ水爆実験で第五福竜丸死の灰（3 月）
1956	昭和 31		『続 2 つの遺伝学』（理論社）	50	フルシチョフのスターリン批判（2 月）
1957	昭和 31		『改稿進化論』（岩波書店）	51	ソ連が世界初の人工衛星打ち上げ
1961	昭和 36		雑誌『哺乳類科学』　創刊に関与	55	農業基本法公布
1963	昭和 38		『進化学入門』（紀伊国屋書店）	57	ケネディ大統領暗殺（11 月）
1964	昭和 39		『国民のための理科教育』（編著）（法律文化社）	58	東海道新幹線開通，東京オリンピック開催（10 月）W. ハミルトン　血縁淘汰説発表
1965	昭和 40		日本ミチューリン会副会長に就任	59	米軍ベトナム北爆開始（2 月），ルイセンコ失脚
1968	昭和 43		『2 つの遺伝学　第 3 巻』（理論社）	62	大学紛争激化，木村資生　分子進化の中立説を発表（Nature）
1969	昭和 44		『生物地理学』（築地書館）	63	東大に機動隊突入（1 月），アポロ 11 号月面着陸（7 月）
1970	昭和 45	3	定年退官，『進化・系統分類学 I・II』（共立出版）	63	日本万国博覧会（3 月），三島由紀夫割腹自殺（11 月）
1972	昭和 47		脳梗塞（？）で倒れる（12 月）	65	山陽新幹線（新大阪～岡山開通）（3 月），沖縄本土復帰（5 月）
1973	昭和 48			66	C. ローレンツ ノーベル生理学・医学賞
1975	昭和 50	1/29	逝去	68	山陽新幹線（岡山～博多開通）（3 月）E. ウィルソン『社会生物学』
1977	昭和 52		『進化・系統分類学 II（増補版）』（共立出版）		

も徳田の先見性であろう（現在のエボデボ研究はなんと発展めざましいことか！）．いずれにせよ，本川氏の結論のごとく我々日本の哺乳類学者は未だに徳田御稔の枠組みから抜け出ていないようである．

三中氏による講演では，徳田進化論と種概念への批判についての話が中心となった．徳田は種を「種族維持あるいは進化のための単位」として捉え，実在するものとした．三中氏は種をこのような実在する単位とする考えが徳田の書物によって流布し，日本の進化研究に多大な負の遺産を残したとする．ただし，現在は種族維持の単位としての種ということに賛同する研究者はごく僅かであると思われ，今更，徳田の「吊し上げ」をしても意味は無いだろう．それよりも，そのような考えがどうして学界や社会に広まったかを解明することが今後の進化研究の上で生産的だろう．また，三中氏が重要課題とした「種問題」には，種をタクソンとみなす場合には実在論対唯名論，カテゴリーとみなす場合には一元論対多元論という対立があり，これは生物学の問題ではなく，哲学・形而上学の問題であるとした．そして，生物学で種問題がいつまで経っても解決できないのは，哲学を本気でやらないからであり，種問題を解決したければ生物学者は哲学を真面目にやるべきだと主張した．三中氏はこのことをあえて挑発的に発言しているように思えたが，これに対して反論する人はいなかった．私は参加者の多くが，種問題は哲学の問題であり，それについて我々の理解が足りない，ということに納得したものと解釈した．カテゴリー論はギリシャ哲学からカントやヘーゲルなどのドイツ哲学を経て現在まで続いている問題である．また，実在論と唯名論の対立はスコラ哲学との関連が深いようである．三中氏の言うとおり，我々の多くは哲学についてあまりに無知すぎる．この点，三中氏の主張に大いに賛同する．しかし我々は哲学プロパーではなく生物学者としての「本務」がある．形而上学的問題だけでなく，目の前にも解決すべき問題が多々あり，哲学的問題を扱うといっても限界があろう．ここは我々と哲学者が近づく必要がある．また，哺乳類学会などの生物系の学会等で「生物学者のための哲学の学校」等の開講の必要性も感じた．また，三中氏の説明のごとく，徳田の進化論とくに晩年のルイセンコ的進化論は破綻していることはほぼ万人が認めるものであろう．徳田は，種は個体の集合であるが単に物理的に個体が集まったのではなく，個体という実体が集合し質的に変化が起こり，種という実体に止揚（アウフヘーベン）し，種というシステムに変化すると考えていたようだ．弁証法的進化論にとっては種は実在して当然の物なのである．そして三中氏はこの種の実在論に真っ向から反対し批判した．私はこれに対して，分類学者の側からの強い反発があると予想したが，意外にも反論はでなかった．最初から立場が違うから反論しても仕方ない，とみたか三中氏の主張に賛同したかのどちらかであろう．

総合討論では，まず，はじめに阿部氏にコメントを頂いき，当時の徳田との哺乳類の変異研究でのやりとりなどの逸話をお聞かせ願った．その後，一般参加者を含めた討論の時間としたが，元京大霊長研の相見満氏などから当時の徳田の活動などを紹介していただいた．徳田御稔は人間として，生物学者としてきまじめであったことが良くわかった．また金子氏からは注目すべき補足があった．終戦後暫くして，野鼠被害が著しくなり，いかにして森林を野ねずみの害から防ぐかが社会的な緊急課題の一つとなった．このような社会的要望があり，徳田はそれに応えるように齧歯類の研究を基礎と応用の両面から進めていったそうである．つまり野鼠被害があったからこそ，現在の日本の哺乳類学が本格的に進展してきたともいえる．当時のネズミ問題は現在のシカ，イノシシ，ニホンザル問題と状況は非常に似ている．今，日本の哺乳類学界では，大型獣の野生動物管理関係の研究が非常に盛んであるが，これらが自然科学としての哺乳類学の進展にどのぐらいコントリビュートするかは今後の展開次第である．大型獣研究者からも徳田御稔に相当するような人物が出現してくれることを望みたい．

今回の演者を敢えて色分けすれば，金子，岩佐，本川の各氏は親徳田派，三中氏が反徳田派となろうが，総合討論では，一般参加者も含めて，種実在論と弁証法的進化論についての激しいやりとりが予想されたが，大きな論議には至らなかった（単に時間が無かったから，という意見も頂戴した）．あるいは両者ともに徳田の正と負の両面を認め合ったということであろうか？今回，徳田の業績を振り返ると，彼は生物学者として先進的で，現代進化学研究の嚆矢となるような視点をもっていたことに改めて驚かされた．しかし一方で，そのような先見性をもちながら，ルイセンコ失脚後もなぜその進化論に固執し続けたのかが不思議でならない．この原稿執筆中に，徳田御稔と直接論議をした人達が集まったパーティーに参加する機会があった．そこである方から晩年の徳田も確固としてルイセンコ説を唱えていたとの証言をいただいた．結局，発表者，参加者のだれもが，なぜ徳田がルイセンコ学説に傾倒していったかを明確に答えられる人はなく謎のままであった．金子氏によれば，戦前より同僚の可児藤吉の影響と植民地支配にある意味で寄与した自責から，戦後に左翼的運動に同調したことと関係があるのではないか，との説明もあったが，それだけでないだろう．いずれにせよ，徳田は種は実在する進化の単位として認識し，進化は弁証法的に起こる現象ととらえていたことは事実である．徳田のこの進化パラダイムについて，未だに日本の哺乳類学界では総括しきれていないように思える．

個人的には，今回の集会は時間の関係もあり論議が不十分であり，少々，消化不良の感じを受けた．無責任な発言かもしれないが，今回は若手参加者には是非とも学問上の喧嘩という現場を見せたかったところであるが，それもできなかった．これもスケジュールの組み立てと司会を勤めた私の司会能力不足によるものであり深く反省する．しかし，結果として私の中にあった遠い徳田御稔像がかなり具体的になり身近に感ぜられるようになった．これは徳田に直接に会ったことのない人達に共通した考えではないかとおもう．また同時代を過ごされた方々も当時の徳田との熱い記憶が甦り，後進のためになにか残さねばとの思いに至ったに違いない．

今回の集会をやって良かった，という御意見も集会後，何人かの方に頂いた．今後，保全関係者も含めた哺乳類研究において，種とはなにか，種の哲学的，実学的意義をより深く考え，口泡とばして論争する集会があってもよいので

はないかと思う．徳田御稔の業績を発展的に（弁証論法的でなくても！）乗り越えていくのが，日本の哺乳類学研究の先達に対する何よりの供養，恩返しとなろう．

謝　　辞

この集会で発言された方々に感謝の意を表します．また「農の会」柳下登氏には徳田御稔の略歴に関する情報提供を頂き感謝いたします．

なお，各演者の要旨はそれぞれの発表者の文責であるが，その他の部分および報告書全体の構成の責任は大舘にあることを明記しておく．

Satoshi D. Ohdachi, Yukibumi Kaneko, Masahiro A. Iwasa, Masaharu Motokawa and Nobuhiro Minaka: A report on the workshop “A biography of Dr. Mitoshi Tokuda and his influences in mammalogy and evolutionary sciences” at the Joint Congress of the 16th Wildlife Conservation Society and Mammalogical Society of Japan 2010

著　者：大舘智志，〒060-0819 札幌市北区北19西8　北海道大学低温科学研究所　✉ ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp
金子之史，元香川大学教育学部
岩佐真宏，〒252-8510 神奈川県藤沢市亀井野1866　日本大学生物資源科学部動物資源科学科
本川雅治，〒606-8501 京都市左京区吉田本町　京都大学総合博物館
三中信宏，〒305-8604 茨城県つくば市観音台3-1-3　農業環境技術研究所